

渋谷・長崎歴史文化情報発信塾

長崎偉人の江戸・東京開花

幕末～明治! 日本の近代化・文明開花に
功績を残した「長崎人」の東京における足跡



小曾根 乾堂



高島 秋帆



平井 希昌



上野 彦馬



内田 九一



阿 礼之

長崎伝習所東京塾
渋谷・長崎歴史文化情報発信塾



塾長 倉持 基

■ 塾長コメント ■

私の本業は都内にある私立大学の教員で、専門は最新技術を用いて幕末・明治期の古写真を歴史資料として活用する研究（“歴史情報学”の一分野である“歴史写真学”）です。古い写真を扱う分野の研究をしているため、大学院生時代から日本写真発祥の地である長崎には大変お世話になっており、自分が現在の研究をし続けられているのも長崎（あるいは長崎の歴史）のおかげと言っても過言ではありませんでした。そんな長崎に何かしら恩返しをしたいと以前から常々考えていましたが、6年前から東京都渋谷区のコミュニティFM「渋谷のラジオ」でナビゲーターやパーソナリティをさせていただくようになり、3年半前からはラジオ番組を通じて地道に渋谷と長崎を繋げる活動をしてきておりました。

現在、私がラジオパーソナリティとして活動している渋谷では、100年に一度と言われる大きな再開発が続いており、2027年まで継続されることになっています。そんな時に、友人の長崎出身者から、長崎でも100年に一度の大きな再開発が行われていることを聞きました。100年という月日は、長崎が築き上げてきた膨大な歴史物語のほんの1ページに過ぎませんが、その1ページを紡ぎ出すの

に必要な長崎の特異な歴史文化遺産は全国の方々に、あるいは後世の人々に、「日本遺産」「土地国宝」として伝えて行かなければならないものだと思っています。そんな長崎独特の歴史や文化と、日本の情報発信拠点である渋谷の情報発信力とを結び付けようとする試みが、「渋谷・長崎歴史文化情報発信塾」の発想の源でした。100年に一度の大再開発という歴史の転換期にある長崎の歴史や文化を、同じく100年に一度の大きな再開発が進行中の渋谷からの視点で細見したいと考えた次第です。

塾の初年度となった2023年度には46名もの塾生の皆さんにご応募いただき、手探り状態の中ではありましたが、ある程度の成果を挙げることもできました。この成果を基に、2024年度も江戸・東京に残る長崎の足跡や影響を追究していきたいと思っています。

■ 塾の目的 ■

江戸・東京にある長崎の息吹が感じられる場所、長崎が生んだ人物と関わりのある東京の名所等にスポットを当て、“歴史・文化×情報発信”をコンセプトに、あまり知られていない東京にある長崎ゆかりの場所を発見・発掘し、それらの歴史情報を日本の情報発信拠点・渋谷から全国に向けて紹介します。

全国的に若者に人気のある町、渋谷から長崎の特異な歴史や文化を発信することにより、「歴史離れ」が進んでいる現代日本の若者たちには長崎の歴史や文化に関心を持つ足掛かりを作ってもらい、若者自らが自主的、積極的に長崎の歴史・文化を探索、体験できるように仕向けたいと考えています。更には、上記のような活動を通じて、性別・年齢層を問わず、東京から遠く離れている長崎を身近に

感じてもらうとともに、長崎出身者の方々へは郷土愛を呼び覚まし、今まで長崎と繋がりのなかった人たちには長崎に興味や親しみを持ってもらい、実際に長崎を訪れるきっかけになることを目的としています。

■ 塾の研究・活動内容 ■

2023年度の活動としましては、次の5点としました。

1. 勉強会・座談会を開催し、長崎生まれの歴史上の偉人たちが江戸・東京で残した足跡や、その人物ゆかりの土地・物等を調査・探索、その歴史情報を記載し塾生で共有する。
2. 勉強会・座談会で知り得た歴史情報をもとに、東京都内の長崎ゆかりの地のフィールドワークを行う。（また、将来的に「江戸・東京長崎さるく」のような企画が行えるかどうかを検討する）
3. 渋谷区のコミュニティ FM「渋谷のラジオ」（推定視聴者数45万人）で、塾活動により得られた長崎に関する歴史情報を発信する。
4. 渋谷区内で開催される祭り等で、長崎に関するイベントを開催、当塾の活動で得られた歴史情報を発表する。
5. 1年間の研究成果をまとめ、冊子やパンフレットの形で渋谷区内・東京都内で配布する。

■ 塾活動の成果 ■

2023年度は特に、「近代以前に長崎に生まれ、江戸・東京に大きな足跡を残した歴史的人物」に着目し、砲術家の高島秋帆（1798～1866）、篆刻家・事業家の小曾

根乾堂（1828～85）、唐通詞・外交官の平井義十郎（後名は希昌,1835～96）、唐通詞・教育者の何礼之（1840～1923）、写真家（写真師）の上野彦馬（1838～1904）、同じく写真家（写真師）の内田九一（1844～75）の6名に焦点を当てて調査対象とし、成果物を作成することにしました。この6名に絞ったのは、それぞれの人物の子孫が当塾の塾生または当塾塾生の近親者・関係者であり、それ故に当塾の1年足らずの調査・研究でもある程度の足跡を掘めたからです。それぞれの人物の足跡の詳細については、当塾で制作した冊子『長崎偉人の江戸・東京開花』に掲載されておりますので、是非一度ご覧いただければと思います。



また、当塾塾生の斎藤達章さんによって動画『日本初の西洋砲術家・高島秋帆』が制作され、伝習所まつりに合わせて公開されました。イラストを手がけたのは、長崎市在住のイラストレーター・天壤さん。ナレーションを務めたのは、長崎市の声優事務所「アナウンス倶楽部」所属の下田昌嗣さん。高島秋帆役を担当したのは、長崎市出身の声優・初村健矢さんです。ぜひご鑑賞ください。

【日本最初の西洋砲術家・高島秋帆】

<https://www.youtube.com/watch?v=ED1mcUEdgNs>

渋谷・長崎歴史文化情報発信塾 活動記録

日 時	場 所	内 容
令和5年		
6月10日(土)	VILLENT 新宿 301 会議室	総会：塾の目的、活動内容、役割分担などの確認
7月22日(土)	ともながクリニック (新宿)	勉強会：江戸・東京で活躍した長崎出身者の洗い出し作業と調査計画を検討
8月19日(土)	ともながクリニック (新宿)	討論会：郷土坂本家十代目当主・坂本匡弘さん、小曾根乾堂玄孫・小曾根克秀さんをゲストスピーカーにお迎えしての討論会
9月16日(土)	ともながクリニック (新宿)	勉強会：高島秋帆に関する勉強会、および高島秋帆に関するフィールドワークの打合せ
10月21日(土)	YCC 代々木八幡コミュニティセンター	講演会：長崎会場から、小曾根家（本家）第17代当主・小曾根吉郎さん（長崎市小曾根町在住、小曾根乾堂玄孫）には「小曾根乾堂の東京での足跡」のテーマで、また、浪の平歴史探訪の会の鮫島和夫会長（元長崎総合科学大学教授）には「幕末期の浪の平と歴史まちづくりの現状」のテーマでご講演いただき、講演後には東京会場の塾生と質疑応答
	長崎市市民活動センター ランタナ	
10月22日(日)	板橋区立グリーンホール前道路及び周辺	高島秋帆ゆかりの地である板橋区で開催された板橋区民祭りに参加、高島流砲術を継承する西洋流火術鉄砲隊保存会の皆さんの演武を見学するとともに、板橋区の坂本健区長と交流
11月18日(土)	板橋区内の高島秋帆ゆかりの地とその周辺	長崎出身の砲術家、高島秋帆の江戸での足跡を訪ね、高島秋帆ゆかりの場所とその周辺地域のフィールドワークに参加塾生全員で行う
11月25日(土)	深川江戸資料館・小劇場	幸若舞芸術文化協会・幸若まち子会長のご厚意で、幸若舞・日本舞踊の公演『百合若大臣と星の世界～八幡さまと月の街・深川～』に塾生を招待していただき、長崎壱岐島の伝説として有名な『百合若大臣』を鑑賞（塾長の倉持は同公演のトークセッションで司会を担当）
12月9日(土)	ともながクリニック (新宿)	勉強会：2023年中に集めた資料と情報の整理とこれまでの活動をまとめて塾生で話し合い、年明け以降のスケジュールと活動内容を決定

日 時	場 所	内 容
令和6年		
1月13日(土)	HIDAMARI 渋谷@貸し会議室	ミーティング：冊子制作と編集作業について
1月14日(日)	多目的レンタルスペース NEW 新宿駅	ミーティング：冊子制作と編集作業について
1月20日(土)	長崎県東京産業支援センター（四谷）	ミーティング：成果物として作成する冊子の進捗状況報告、塾生各々の役割分担の確認
2月10日(土)	ともながクリニック（新宿）	ミーティング：冊子制作の進捗状況報告、足りない部分の確認
2月17日(土)	乗泉寺（渋谷区鶯谷町）	ミーティング：冊子内容のブラッシュアップ作業
3月2日(土)	長崎県東京産業支援センター（四谷）	ミーティング：成果物の冊子編集の進捗状況報告、および報告書作成の進捗状況報告。また、足りない資料や情報等の洗い出し作業
3月9日(土)	ともながクリニック（新宿）	ミーティング：成果物および長崎伝習所まつりにおける発表内容の最終チェック、1年間の塾活動の総括
3月16日(土)	ベルナード観光通り	長崎伝習所まつりに参加
3月24日(日)	乗泉寺（渋谷区鶯谷町）	渋谷桜丘桜まつりで研究発表

1. 今年度の成果物『長崎維新の江戸・東京開花』について

2023年度に取り上げた長崎出身者6人の江戸・東京での足跡をまとめた冊子『長崎偉人の江戸・東京開花』を制作しました。表紙デザインは小曾根乾堂の来孫、小曾根愛美さん（塾生）にお願いしています。内容は次の通りです。

1. はじめに
2. 高島秋帆について
3. 小曾根乾堂について
4. 平井義十郎（希昌）について
5. 何礼之について
6. 上野彦馬について
7. 内田九一について
8. 終わりに

以上です。ここでは、『長崎偉人の江戸・東京開花』に書かれた長崎の略歴についてダイジェスト的に記しておきたいと思います。

2. 高島秋帆



高島秋帆は、寛政10年（1798年）に長崎で生まれました。父・四郎兵衛は、出島台

場を守る長崎警備の重責を担っていた町人。秋帆は、幼いころから文学好きで利発。学問に励み、蘭学に興味を持ち語学を習得しました。絵心もあったようです。文化5年（1808年）、秋帆が11歳のときにイギリス軍艦フェートン号が、オランダ船に擬装して長崎港へ入港、2名の商館員を人質にとり、水や食料を積ませた後に長崎港を立ち去り、当時の長崎奉行、松平康平（1768～1808、別名は康秀、康英）は責任をとり切腹、という「フェートン号事件」を目の当たりにします。フェートン号事件の前には、ロシアが通商を申し込んできたのを出島商館長ヘンドリック・ドーフ（1777～1835）の意見を聞きロシア使節団を退去させたことで、数年後にはその報復として択捉島を襲撃し、日露関係が悪化するなど緊迫もあっています。当時は、オランダとイギリスは交戦中で、子ども時代の秋帆にとっては緊迫した海外情勢を知ることとなり、日本は大丈夫かと、国防意識が芽生えたと言われています。この頃の長崎は、日本で唯一の国際貿易港であり、国防の防波堤という重要な役割もありました。常に長崎港で巨大な海外船を取り締まる父たちを見ながら、世界のことを聞いていた秋帆は、警備の必要性を常に感じていたことでしょう。

秋帆の父、高島茂起は、当時の日本式砲術である荻野流砲術の奥儀を習得し、師範役を務めていました。秋帆は、21歳の頃には、町年寄見習に就任し、出島に自由に出入りしオランダ人たちと仲良くなります。秋帆はオランダ商館の世話をしながら、船に装備された大砲はじめ武器に触れ、海外でのアヘン戦争のこと、香港の話などを知り、日本も植民地になりかねないと危機感を持ち、幕府に進言しますが、誰もが日本が負けるわけない

と、全く取り合わなかったようです。そんななかで秋帆は、当時のオランダ商館長のヨハン・ウィレム・デ・スチュレル（1776～1855）と親しくなります。スチュレルは、ナポレオンが破れたワーテルローの闘いに従軍した軍人で元陸軍大佐。その彼から直に西洋兵器、西洋兵術を熱心に学びます。蘭学に長けていた秋帆は、この頃からオランダから銃砲や兵術書をしきりに輸入し、独自で理論や技術の研究習得に努めます。そして、西洋式を取り入れた独自の高島流砲術をつくりあげ、天保6年（1835年）には、洋式砲モルティール砲。を鑄造します。これを佐賀の武雄鍋島家は採用。これにより、高島流砲術が本格的に戦術として広まっていきます。この頃、秋帆は町年寄本役となり、江戸にも名が聞こえるようになります。

天保12年5月（1841年6月）、幕命により、現在の東京都板橋区にあった徳丸原で、秋帆は弟子99人と共に西洋式砲術調練を披露します。大砲の爆音が轟き、砲弾は遠くまで飛び、その破壊力の大きさに人々は恐れ驚いたと記録されています。和式の射撃は、一人ひとりを打ち抜くことに優劣に重点を置くことに対し、西洋式は組織的な兵術。大勢を打ち抜くことに重点を置いており、これを独自に其々の良いところを取り入れたのが、高島流砲術となっています。これら集大成を見事に披露しました。この歴史的な瞬間を見たのは、幕府の検分者や、各地の大名、蘭学者、砲術師に町民のやじ馬など、約2,000人とも3,000人とも言われています。なかには勝海舟もいたといわれています。ここから、日本は軍事力の強化が始まり、佐賀鍋島では国産の反射炉をつくり、鉄の鑄造技術を進化発展させ、日本は開国に備えていきます。工業近代

化の始まりです。

そんななか、秋帆は洋学派（革新派）と和学派（保守派）との軋轢のなかで、長崎貿易の役員でもあったことから和学派の一味から、不正の言いがかりをつけられ、約11年間投獄されます。世界中から、通商条約締結を迫られた日本でしたが、嘉永6年（1853年）にペリー来航で海防策が急務となり、秋帆は釈放。このときには名前を嘉平と改め、日本は世界を広く見て開かれるべきだと平和開国通商「嘉永上書」を幕府に提案しています。50代を越えていました。晩年は、現在の東京都文京区で過ごし、薩長同盟からの激動の幕末を見届けることはなく、慶応2年（1866年）に亡くなります。

昭和40年代の高度成長期に板橋区は、秋帆が弟子たちとともに披露した「徳丸原」にマンモス団地をつくります。ここを高島秋帆の名前からとり、町名を「高島平」とします。

長崎町人から、西洋砲術家となった秋帆。鎖国時代の日本で唯一、世界的視野で日本を取り巻く状況を見る視点を持ち、環境から培った能力を生かし、日本を守るために行動力で示し、国を動かすきっかけを作った偉人であったと、もっと注目される方ではないでしょうか。ぜひ改めて長崎人として注目していただきたいと思います。

3. 小曾根乾堂

小曾根乾堂（栄）は、文政11年5月2日（1828年6月13日）、長崎本博多町、現在の長崎市万才町に生まれ、現在の長崎市小曾根町、浪の平地区に幕末から明治にかけて活躍した小曾根家第13代当主です。小曾根家初代は、江戸鎖国時代唯一合法的に海外との取引が出来た長崎出島を作った25町人の筆



頭を務め、それ以後は代々系割符商も務め、日本人で出島に出入りできる立場だったことから、小曾根家には海外から真っ先に色々な文化・情報が入ってきました。幕末期、乾堂の代になると、アジアの植民地化やアヘン戦争の話などの情報が入ってきて、乾堂は日本が外国に植民地にされるのではと危惧し、日本の将来を心配して、各大名や維新の志士たちへ、欧米に立ち向かうため国を一つに結束し、貿易で国を豊かにする貿易立国と、それによって戦艦を揃え国を強くする富国強兵を唱えていました。その後、明治新政府の時代になると、政府や明治天皇に対して、外国の貿易商に日本との貿易による巨額の利益を奪われ、貧しくなる日本を救いたいと思い、関税や日本貨幣と金との交換などについて建白書・建言書を提出することになります。

一方で、幕末期に長崎には海外の文化が入り、全国より優秀な人材が多く学びに来ました。文化と人材の最高水準で集積した都市・長崎、とりわけ浪の平地区を外国人居留地を含めた日本の近代化のモデルタウンとし、日本の文明開化に尽力しました。

生業としては、貿易商、不動産業、質商に従事していました。幼少期より英才教育を受

けて、書・画・明清楽・陶芸・篆刻に秀で、広範囲な分野の人々と多角的に交流をもった国際的文化人です。篆刻は特に優秀で、明治天皇の御璽・国璽を刻すほどであり、他にも公家、太政大臣、三条家第31代当主・三条実美、公爵、内閣総理大臣・伊藤博文、幕臣、陸軍総裁・勝海舟、越前福井藩第16代藩主・松平春嶽、紀伊藩第13代藩主・徳川慶福(後の江戸幕府第14代将軍・徳川家茂)、紀伊藩第14代藩主・徳川茂承、宇和島藩第8代藩主・伊達宗城、佐賀藩支藩蓮池藩第8代藩主・鍋島直与、佐賀藩武雄領第28代領主・鍋島茂義、幕臣、長崎海軍伝習所第一期総監・永井尚志、松代藩士、兵学者・佐久間象山、「海援隊商事」、「宮内省書印」の印他を刻しています。

最期は、明治18年(1885年)11月27日に屋敷をコレラ患者に開放し、治療していましたが、自分も感染して亡くなりました。

4. 平井義十郎(希昌)

平井義十郎(希昌)は、天保10年(1839年)1月27日、長崎出島組頭森家第七代森永年の長男として長崎興善町で生まれました。幼名を彦吉、永昌とといいます。幼い頃より中国語、英語、フランス語等に秀でていました。

嘉永5年(1852年)8月、14歳の時、唐通事平井家9代平井雅高の養子に入り、後に代目昌成の娘、斐子を妻に迎え平井家10代目となり、名も平井義十郎に改名しました。平井家4代雅明の六女津義が出島組頭森家5代目忠英に嫁いでいます。

出島組頭とは出島のオランダ商館を管理する地役人で、オランダ商館を管理するトップは長崎奉行です。その実務に当たる責任者が町年寄で、町年寄は出島乙名2名を任命し、



その下に筆者、通訳として大通事・通事目付・小通事・稽古通事をおいていました。また、唐通事とは、江戸幕府が開かれた直後に地役人として長崎を中心に創設され、貿易全般の取り仕切りや海外情報の収集、長崎に住んでいる唐人の監視役等を任されていた技能集団です。

平井家は、祖が平井敦昌で鎌倉の出身。肥前富岡藩主寺沢志摩守広高が幕命により初代長崎奉行として長崎に下向の際同道して長崎平戸に居住、後に移住し、安政3年（1856年）3月に稽古通事となりました。

安政5年（1858年）10月、ロシア・オランダ両国の通商条約文の翻訳を仰せつかり、同年12月に唐通事5名とともに長崎奉行・岡部長常より長崎港に停泊中のアメリカの軍艦に趣き「英語修学」を命じられます。その際、平井義十郎、何礼之助が成績優秀と表彰されました。文久2年（1861年）、長崎海軍伝習所新設通弁御用兼務を命ぜられ、翌文久3年7月には、幕府老中よりの命で国の機密文書の翻訳、外国人との機密事項を取り扱うため、何礼之助とともに幕府の御家人となり、「長崎奉行支配定役各」に抜擢され、通事職の最高位になります。また、「英語伝習所」のフ

ランス語責任者ともなりました。

慶應元年（1865年）には、「済美館」のフランス語担当の学頭を拝命されています。

5. 何礼之



何礼之（が・れいし、または、が・のりゆき）は、天保10年（1840年）9月、唐通事、何海庵系の第8代目として長崎伊良林郷に生まれました。幼い頃より唐通事の中で俊才との評判で、長崎英語伝習所に入り益々頭角を現します。安政5年（1858年）12月、唐通事5名とともに長崎奉行岡部長常より長崎港に停泊中のアメリカの軍艦に赴き「英語修学」を命じられ、その際、平井義十郎、何礼之助が成績優秀と表彰されました。文久3年（1863年）7月、幕府老中よりの命で国の機密文書の翻訳、外国人との機密事項を取り扱うため、平井義十郎とともに幕府の御家人となり、「長崎奉行支配定役各」に抜擢され、幕臣となります。

元治元年（1864年）から個人で英語塾を開設していましたが、そこには日本全国の各藩から選ばれた優秀な人材が多数学んでいました。教え子たちには、陸奥宗光（のち海援隊士、維新後に外務大臣）、前島密（内務省逓

局長・逓信次官）他多数がおり国の根幹を支える人材として活躍しました。

明治元年（1868年）、東京開成所（現東京大学）に英語の教授として招かれ、翌明治2年、新政府の命により大阪英語学校を設立しました。これが後の三高、京都大学です。

明治4年（1871年）11月に、「外国の主な国と幕末に結んだ条約が不公平な為」、明治政府の高官、岩倉具視を特命全権大使として、副使を木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳、一等書記官として田辺太一、何礼之他50名が岩倉使節団を構成して、約2年間各国を歴訪しますが、何礼之一等書記官の語学力及び博識にて各国代表者も一目置いていたので、交渉がスムーズに行えたと唐通事仲間の自慢の種と言い伝えられています。

6. 上野彦馬



上野彦馬は、日本の写真術の開祖であり、日本最初期の商業写真師として、幕末から明治後期まで活躍した人物です。

彦馬は天保9年（1837年）、長崎市銀屋町で、上野俊之丞と以曾の四男として生まれました。父・俊之丞は、旺盛な探求心を持ち、御用時計師であり化学者でもありました。薩

摩藩の御用商人も務め、輸入した銀板写真の機材を納めてもいます。母・以曾も教育熱心であり、5歳で寺子屋・松下文平塾に入りました。

父の死後、14歳で家督を継ぎ、後見人で医師・南画家の木下逸雲の紹介で、現在の大阪府日田市にある日本最大級の私塾、広瀬淡窓の咸宜園で3年間、漢学を学びます。安政3年（1856年）に長崎に戻り、（父が亡くなったため）閉鎖中だった家業（製薬、中島更紗の染料、硝石の製造）の再興には洋学が欠かせぬと、大蘭通司の名村八衛門に入門し、蘭語を学び始めます。その後、医学伝習所に新設された舎密試験所に入り、医官・ポンペに舎密学（化学）を学びましたが、先に入所していた津藩（藤堂家）の藩士、堀江鋏次郎と知り合い、以後研究仲間として蘭化学書を読む中で「フォトグラフィー」と出会って大いに関心を持ち、「撮影術」と訳しました。また、写真術を習得するとともに、写真に必要な化学薬品の製造に成功します。さらには、来日したフランスのプロ写真家、ピエール・ロシエにも学びました。

その後、彦馬と鋏次郎は性能の良い写真機を手に入れたく、藤堂藩主に願い出た結果、購入の許しを得て、出島商館のボードウィンを通じて写真機を輸入します。万延元年（1860年）、藤堂藩主の命により、二人は写真機一式を持って上京し、神田和泉橋の藤堂藩屋敷に約1年滞在し、客の諸藩主や旗本の写真を撮影しながら、二人は九段の蕃書調所に通い、化学の勉強を続けます。後に津の藤堂藩藩校・舎密研究所で講義を担当し、文久2年（1862年）には鋏次郎と共同で化学解説書『舎密局必携』を出版しました。この書物は付録で撮影術が詳解されおり、写真術

に関する日本最初の出版物といわれています。

同年、故郷の長崎に戻り、精錬所の敷地で上野撮影局を開業します。松本良順、高杉晋作、坂本龍馬、勝海舟、榎本武揚、伊藤俊介（博文）、グラント将軍、ピエール・ロティ、清の丁汝昌、ロシアのニコライ2世他、多くの幕末の志士、明治の著名人を撮影し、さらに明治7年（1874年）の金星の太陽面通過の時はダビッドソンのアメリカ撮影隊に加わり天体観測写真を撮影、明治10年（1877年）には西南戦争の戦跡を撮影し、同じ年に上野公園で開催された第1回内国勸業博覧会では鳳紋褒賞を受賞しました。

明治19年（1886年）前後は彦馬撮影局の全盛期で、年間撮影総収入15,000円もあったといわれています。また、明治22年（1889年）にはウラジオストク視察に赴き、ロシアの軍艦、要塞を撮影しており、港のパノラマ写真（全8枚）も現存しています。翌年、ウラジオストク支店（支店長：渡瀬定太郎）を開店、上海（支店長：鈴木忠親）、香港（支店長：上野才造）にも支店を開き、写真業拡張に努める傍ら、後進の指導にもあたり、多くの門人を輩出しました。

明治25年（1892年）には明治天皇・昭憲皇太后の写真を400組焼き、九州中の学校に奉安します。1893年のシカゴ万国博覧会（コロンブスのアメリカ大陸到達400周年記念）でも賞を授与されますが、その受賞理由は「趣味の良さと芸術的仕上げ」が評価されたからでした。

内田九一、富重利平、守田来三、田本研造など、数多くの写真師と交流し門人を輩出しました。弟子には厳しい師であったようですが、その反面、弟子思いの一面もあり、200人分の洋食器をそろえ、料理をふるまうこと

もあったそうです。

趣味も多く、春はハタ揚げの名手として、「水に楓（かえで）」の印の「はた揚げ」を楽しみ、夏には「金魚」や「朝顔の会」の仲間と新種の「朝顔」を愛で、弓の仲間との写真も残っています。

明治37年（1904年）、長崎で死去しました。享年67。戒名は如雪院真叟李溪居士、墓所は陸臺寺裏山。最後の言葉は、「どうしてもカーボンを完成させねば...」であったとのこと、生涯を通じて写真術の進歩・発展のために研鑽を積んだ一生でした。

7. 内田九一



長崎・医学伝習所の“ポンペー門”の中で、上野彦馬の後輩の後輩に当たるのが、後に「東都（東京）随一の写真師」と謳われ、明治天皇の公式写真「御真影」を歴史上初めて撮影した写真師、内田九一です。弘化元年（1844年）、長崎万屋町に生まれ、年少にして両親を亡くした九一は、医学伝習所の塾頭であった松本良順（1832～1907、のち初代陸軍軍医総監）の家に引き取られ、医学伝習所で医学を修業するうちに写真術と出会います。彦馬とも交友関係を結び、当時の最先端の写真

術を身に付けるや、若くして長崎を離れ、大坂、横浜、東京へと拠点を移しながら、優れた芸術的センスと時代を先読みする優れた感性を武器に、「東都随一」と称された写真師として、また、写真館「九一堂寿」の経営者として大成功を収めました。

九一は明治天皇の御真影だけでなく、旧徳川幕府・明治維新の志士や高官、各界著名人、さらに、当時の東京をはじめとする日本各地の風景や名所・旧蹟を撮影・販売して後世に残し、日本の写真黎明期においてメディアとしての写真の可能性を証明しました。加えて、「写真をひとつの業として行なっていく」との強い信念を持ち、写真業がビジネスとして成り立つことを世間に認知させた最初の写真師とっていいでしょう。

8. 塾生からのコメント

● 小曾根淳二（小曾根乾堂玄孫）

この1年を振り返ると昨年の2月に長崎市の企画で伝習所塾というものが東京にもあると長崎市フェイスブックで知り、塾長の倉持氏と塾経験者事務局長の中村氏に相談し、この「渋谷・長崎歴史文化情報発信塾」を立ち上げようとなりました。

それは、日本の長い歴史の中で長崎という場所は、原爆や隠れキリシタンなどの色々な歴史がある中、日本の歴史上最大の変革である産業革命が始まった場所であり、日本の文明開化が最初に起こった土地という素晴らしい歴史があります。しかし、それが世の中にはあまり知られていないというのが現状です。京都や奈良が歴史と文化を背負っている土地であることは、その地に暮らす人たちもそれを認識しています。長崎もまた歴史と文化を背負っている土地であることを、素晴らしい

業績を残した多くの偉人が長崎にいたことを、日本を動かし影響を及ぼした歴史上の英雄たちが長崎で学んでいたことを、世の多くの人に知ってもらい、長崎の人にもっと強く認識し、誇りに思ってもらうために、長崎の外にあり、日本の情報発信の中心地である渋谷から、幕末に長崎出身で日本の発展に功績を残した者、長崎で学びその後日本の発展に活躍した者、長崎に来て長崎で活躍し、その後歴史上英雄になった者で、なおかつ東京に足跡がある者を取り上げる事やあまり知られていない文化・祭りを紹介するために「渋谷・長崎歴史文化情報発信塾」を立ち上げました。しかし、初めての塾で、初めてお会いする方々と手探りで行ったため、今年1年で全てを網羅する事が出来ず、今年はまだ長崎の方々もあまり知られていない、長崎の出身者で日本の発展に大きな功績を残し、しかも東京に足跡がある者にスポットをあて紹介する事としました。これにより少しでも長崎出身の偉人がいたという正しい歴史が多くの方々に伝えていかれる事を期待します。

また、まだまだ多くの偉人が長崎に集っていて、その東京における足跡を次回より紹介していきたいと思います。

最後にこの成果物が出来たのも、倉持塾長のもと1年間共に学び、協力頂いた塾生の方々からであり感謝を捧げます。

● 佐々木信子（上野彦馬曾孫）

毎回発見がある例会、充実の一年でした。フィールドワークには、都営地下鉄一日券を買って臨む意気込み。いま「家業は何ですか？」と問われれば、「この22年間は家業の言葉の海を渡る舟を編む手伝いをしています」と答えます。彦馬なら、「あのゴーレン（揚

げ物)が好きな国の言葉だな?」と言うかな?
2024 年は彦馬の父・上野俊之丞の長崎更紗
について調べたいです。



佐々木さん撮影の郷土坂本家
十代目当主・坂本匡弘さん



撮影風景

- 高山美枝子

今まで幾つかの伝習所在京塾に入れて頂きましたが、今回は今まで以上に長崎が近く感じられました。塾長はじめ塾生の方々の研究熱心な、そして熱い想いを感じました。歴史上の人物の子孫の方々が多く参加されていることもあり、まるでドキュメンタリーの製作

現場にいるような気さえます。今後は自分も掘り下げてみたい人物も居るので調べてみようと思います。

9. 協力者からのコメント

- 西洋流火術鉄砲隊保存会 会長 勝田真幸



我々西洋流火術鉄砲隊保存会は、長崎町年寄で西洋砲術家の高島秋帆先生が天保 12 年（1841 年）に武州徳丸原（現在の東京都板橋区高島平）で行った西洋流砲術調練を顕彰・再現する目的で平成 14 年（2002 年）に結成しました。以後、演武などを通して秋帆先生の事蹟を広めるとともに、演習の場であり、秋帆先生の名から付けられた高島平をアピールするために演武を中心とした活動を続けています。

当面の会の目標は、秋帆先生の故郷である長崎の地で演武を実現させることです。そのために、長崎及び長崎に縁のある皆さまのご協力を賜りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

また、東京近隣にお住まいの方で、我々と活動を共にしていただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡ください。

【連絡先メールアドレス】

takashimaryu.hozonkai@gmail.com

渋谷・長崎歴史文化情報発信塾

塾長	倉持 基				
1	小曾根 淳二	21	船岡 佳生	41	永吉 拓哉
2	中村 奈美	22	佐々木 信子	42	西尾 勝宏
3	高山 美枝子	23	中尾 和美	43	政田 哲児
4	西岡 秀子	24	篠崎 巨佳	44	宮武 俊明
5	田中 由紀子	25	阪出 清	45	山田 晴貴
6	朝長 修	26	小曾根 克秀	46	末松 康春
7	中村 直美	27	小曾根 愛美	47	すぎやま ゆうこ
8	斎藤 達章	28	矢津 陽平	48	
9	茂呂 司	29	矢津 敦美	49	
10	佐藤 正子	30	平井 靖人	50	
11	毛利 哲也	31	稲田 勝次郎	51	
12	倉知 志帆	32	金子 武生	52	
13	関谷 達郎	33	喜多 一郎	53	
14	榎本 隆一郎	34	木本 志帆	54	
15	川添 貴子	35	小沼 百合子	55	
16	菅 千歳	36	坂井 康太郎	56	
17	那須 広則	37	篠原 瞳	57	
18	上田 佳代子	38	柴田 徹郎	58	
19	本間 一之	39	田中 美枝子	59	
20	岡村 真理	40	中西 史和	事務局員	東京事務所 平山 莉映